ヴィガン(イロコス, フィリピン)の街区構成に関する考察

BLOCK FORMATION IN VIGAN, ILOCOS, THE PHILIPPINES

山口 潔子*, 布野 修司**, 安藤 正雄***, 脇田 祥尚****, 柳沢 究*****

Kiyoko YAMAGUCHI, Shuji FUNO, Masao ANDO,
Yoshihisa WAKITA and Kiwamu YANAGISAWA

Vigan is one of the most preserved Spanish colonial towns in the Philippines. With numerous historical buildings and houses, UNESCO registered Vigan as the World Heritage in December 1999. As an entrepôt flourished by Chinese *mestizo* residents, Vigan forms an amalgam of native, Chinese and Spanish cultural landscape. The public spaces such as the *poblacion* (city center) strongly reflects *Leyes de Indias* (Laws of Indies): plaza surrounded by cathedral, convent, city hall, and relatively grid street pattern.

Yet, deviation from the Spanish colonial city planning concept is visible, in comprising two main plazas, and in the indistinct racial residential separation. The paper is composed of: administration history of Vigan and the Philippines; reference to the *Leyes de Indias* colonial law and other Hispanized towns; and considerations on block formation, road width, and lot division in Vigan. In conclusion, this paper proposes 3×3 block subdivision style and the modified use of Spanish module system in Vigan.

Keywords: *Vigan, street system, block formation, Spanish colonial city, Laws of Indies, World Heritage*
ヴィガン, 街路体系, 街区構成, スペイン植民都市, インディアス法, 世界遺産

1. 研究の目的と背景

本稿は、「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」と題する研究の一環として、フィリピン、イロコス・スール州のヴィガン Vigan 市を対象とし、その形成過程および変容過程について考察することを目的としている。

ヴィガンは、スペインによって、セブ Cebu (1565), パナイ Panay (1569), マニラ Manila (1571) について建設された植民都市である(図1)。戦災等で大きくその骨格を変えたセブ, パナイ, そして近年その都市核の一部イントラムロス Intramuros²が復元されたマニラと異なり、ヴィガンはスペインによって建設されたアジアの植民都市として、その当初の姿を今日に伝える興味深い都市である。その歴史的意義が評価され、ヴィガン中心部は1999年ユネスコによって世界文化遺産に指定されている。

本研究では、スペインの植民都市の理念がどのように東南アジア(フィリピン)にもたらされたのか、が大きな視点となる。具体的には、インディアス法³との比較が課題となる。本稿では、まずヴィガンの歴史的概要をまとめた上で、現地調査をもとにして、街路体系、街区構成、そして敷地割りを中心とした考察を行う。街区割りについてはひとつの仮説を提出したい。

ヴィガンに関する既往の研究は極めて少ない。主要な参考文献は末尾に示す通りである。フィリピンにおけるスペイン植民都市計画

の概要について

は、リード Robert R. Reed (1978)

がある。また、歴史的住居バ

ハイ・ナ・バト bahay na bato⁴

については、フィリピン大学

の修士論文ラバ

ン Fatima N. Rabang-Alonzo

(1990) がある。ヴィガンの歴史

についてはキン

グ Damaso Q. King (1990) がある。

本稿のもとになる施設分布調査、住宅類型調査および街区幅の測定を主とする現地調査は1997年7月(脇田祥尚)、1998年9月(安藤

正雄、布野修司、脇田祥尚、柳沢究、平田隆行)、そして2000年8月(山口潔子)の三次にわたる調査である。資料収集、様々なヒアリン

グについては、キング氏とラバン女史の協力を得た。

図1 スペインのフィリピン植民地化の過程
(Reed (1978) を元に作成)

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士前期課程

** 京都大学大学院工学研究科 助教授・工博

*** 千葉大学工学部 講師・工修

**** 島根女子短期大学 講師・工修

***** 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・工修

Graduate Student, Kyoto University

Assoc. Prof., Kyoto University, Dr. Eng.

Assist. Prof., Chiba University, M. Eng.

Lecturer, Shimane Women's College, M. Eng.

Graduate Student, Kyoto University, M. Eng.

2. ヴィガンの成立と都市形成

フィリピンへ初めてのヨーロッパ人が訪れたのはセブにマゼラン Magellan の船団が到達した1521年のことである。しかし、マゼランはセブ対岸のマクタン Mactan 島において殺されており、都市建設には到っていない。スペイン領有の端緒を開いたのは、メキシコ総督府の高官であったレガスピ Miguel Lopez de Legaspi⁵である。レガスピは1565年にサマル Samar 島からレイテ Leyte 島を経てセブ島に至り、砦と居留地を建設した。その後、食糧不足やポルトガルによる脅威の為、69年にバナイ島に拠点を移した。この間、遠征隊員を各地に派遣し、その報告に基づいて交易に有利なマニラを本拠と決定した。当時のマニラは、親族関係にある2人のムスリム王がパシグ Pasig 川を挟んでそれぞれに村を統治しており、木造の砦があったとされる⁶。レガスピは、71年5月にマニラとその近郊トン ド Tondo の首長らと協定を結び、6月に砦の建設を開始した。

スペインはマニラを拠点としながら、各地に教会とプラサ plaza⁷を建設し、そのまわりに現地住民を集住させ、市、プエブロ pueblo を編成した。この市には中心部カベセラ/ポブラシオン cabecera/poblacion とその郊外の周辺村ヴィシタ visita が含まれた⁸。マニラから北に425km 離れたイロコス地方のヴィガン⁹建設にあたったのは、レガスピの孫、サルセド Juan de Salcedo である。サルセドは1567年に物資・人員援助隊としてメキシコからセブにやって来た¹⁰。1572年5月20日に、フィリピンーメキシコ間のより短い航路を求めて出航し、翌月にヴィガンに着いた。しばらく滞在したのち、27人のスペイン人兵士を残し、ルソン島北部における新たなスペイン人の拠点を求める探検に出た。その後、1574年1月にイロコス地方の住民と土地の支配者 Encomiendero¹¹また司法長官 Justicia Mayor の地位をスペイン王から与えられ、ヴィガンに戻った¹²。サルセドは、現地住民に森林を伐採させ、まず砦と宿泊施設¹³、その後教会、市役所を建設した。1574年のサルセドのヴィガンへの帰還には、アウグスティノ修道会の宣教師たちが随行し¹⁴、彼らは1575年4月に聖パウロを町の守護聖人として教会と修道院を建設した。ヴィガンは、フェリペ二世の王子にちなんでヴィジャ・フェルナンディーナ Villa Fernandina と名づけられた。

ヴィガンの歴史について書かれた資料はほとんどが教会資料である¹⁵。そうした記録によれば、1579年、中国へ向かう途中であったフランシスコ修道会の宣教師たちの船が嵐によってイロコス地方に漂着し、宣教活動を行っている。フランシスコ会は宣教活動の便宜上、点在していた村々を集め、宣教拠点である教会や修道院の周りに人々を集住させ、新しく町をつくった。スペイン人植民者と宣教師たちによるこの先住民の集住・移住計画はレドゥクシオン reducción と呼ばれた¹⁶。レドゥクシオンの結果、自立的なバラングイ barangay¹⁷から成っていた現地社会はスペインの統治機構の中に組み込まれるが、これはまたカトリック教区司祭がスペイン植民地権力の代表として日常生活のあらゆる面で住民を監視下に置くことを意味した¹⁸。その後、1591年に教会を修道会に所属しない司祭たちに託し、フランシスコ会はイロコス地方を去った。

17世紀初頭のヴィガンについてスペイン人官吏モルガ Antonio de Morga は「ヴィジャ・フェルナンディーナはルソン島北部イロコス州に建設された教会を持つ町であるが、スペイン人の数は大変少ない」と記している¹⁹。当時、マニラ以外のフィリピン地方都市は、

スペイン人の建設した町であっても、宣教師以外のスペイン人は少なかったと言われている。

1613年のイロコス地方の司教記録によれば、当時ヴィガンの人口は2000人であった。町が成長するにつれ、マニラと同様、人種別の居住区が形成された。カトリック小教区によるヴィガン最古の史料 Libro de Casamiento(婚姻届録)に含まれる資料によれば、1645-60年には、現地住民ナトゥラレス naturales 地区、スペイン人 españoles 地区、中国人(主に福建省出身)のパリアンシリョ pariancillo²⁰又はロス・サングレイス・デル・パリアン los sangleys del parian²¹と呼ばれる地区に分かれていた²²。ただ、プラサのある中心部に宗教施設が集中していること、現在のリサル Rizal 通りの東側がメスティソ地区、西が現地住民地区とされていたことは記されているが、かつての中国人地区やスペイン人地区の位置ははっきりしていない²³。

ルソン島北部においてヴィガンは最初のスペイン人町であったが、6人しか世俗スペイン人がいなかった時期もある。元々、北ルソン司教区の司教座と大聖堂を持っていたのは、港町でヴィガンより多くのスペイン人のいたカガヤン Cagayan 州の州都ヌエバ・セゴビア Nueva Segovia 市であった。しかし、ヌエバ・セゴビアの2代目司教がヴィガンを好んだこともあり、1758年9月にスペイン王室の承認をうけて、ヴィガンは新たにルソン島北部の司教座となった。教会が小教区教会から司教区聖堂に昇格したことに伴って、ヴィガンは行政上の町ヴィジャ villa から市シウダー ciudad に昇格した²⁴。1764年のヴィガン市には21のバリオ barrio²⁵があったが、そのいくつかは18世紀中に市から分離し、新しく町になった。

1803年には人口10,585人を数え、先住民は農業に、中国人と中国系メスティソ(中国人男性と現地住民女性の混血)はマニラ、ヨーロッパ、中国、ボルネオ、マレーシアとの交易に従事し、ヴィガン中心地域を経済的に興隆させた。19世紀中ごろには海外輸物産として、イロコス地方の米・藍・タバコ・綿織物が注目を浴び²⁶、その利益をもとにして煉瓦や瓦を使用した豪勢な住宅がヴィガンに増えた。その都市型住居をバハイ・ナ・バトという²⁷。今日、町の中心部において歴史的町並みを構成するバハイ・ナ・バトを建てたのは、スペイン人・スペイン系メスティソではなく、中国系メスティソであった。

3. ヴィガンの都市構造

3-1 スペイン植民都市計画とフィリピン都市

スペイン植民都市は、一般的にプラサを中心として格子状に街区が形成され、プラサは教会・行政施設・スペイン人指導階層の住宅などに取り囲まれる²⁸。この都市計画の理念、方法を考察する上で、まず想起されるのが中南米のスペイン植民都市の計画指針となった1573年のインディアス法である。

フェリペII世のインディアス法が公布された1573年は、植民都市マニラの建設開始の2年後であり、ヴィガン建設開始とはほぼ同時期である。スペインの文書がフィリピンへ渡るのは、貿易風を利用した年1回のガレオン船によってのみであったことを考えると、マニラやヴィガンの建設当初から、1573年インディアス法の都市計画方針がそのまま生かされたとは考えにくい。また、1573年のインディアス法に含まれる都市計画の方針がフィリピンでも適用されたという明確な記録は無い。

しかし、1573年以前から、一定の指針に基づいて中南米のスペイン植民都市の計画が行われており、1573年のインディアス法はその経験を集大成したものである。フィリピンで建築・都市計画の指導を実際に行った修道士たちは、メキシコでの宣教活動を経て来た者たちであること²⁹、1573年のインディアス法がこの中南米での数々の先例に基づいていることから、インディアス法はフィリピンでの植民都市計画史を見るうえでも極めて重要である。

フィリピンにも「町が市に昇格しスペイン帝国の副王領下の機構に組み込まれ承認されるためには、スペイン王室の法令の基準を満たさなければいけない」という指令は伝わっており、その記録もある³⁰。その基準はインディアス法の都市計画の構成要素とほぼ重なっている。ヴィガンについての資料はないが、ルソン島でヴィガンとマニラの間に位置するパンガシナン Pangasinan 州における都市計画基準がある。市としての承認を受けるための条件が、マニラのサント・ドミンゴ司祭館所蔵の「1840年パンガシナン州に公布されたスペイン王室法令 Real Cédula」として以下のように記されている。

「市の中心部となるべき地区の地理的・環境的考察が必要である。市中心部は洪水の恐れが少ない場所が選ばれるべきである。また市中心部にはブラサ・教会・市役所・司祭館・学校を配置する。町が市に承認される前に政治的・宗教的活動が可能となる公共建築が建ちあがっていなければならない。

市の将来成長のため他の町々とある程度の距離を置かねばならない。市の中心から他の行政区域まで最低半径1-2レグア legua (約5-10km) 離さなければならない。距離を測る基点は、教会前のブラサの中央に立てられた木の十字架とする。

新しい市となるべき街・区域には、増加する人口を見越して、十分な住宅地や農地となるべき土地と、農業・家畜の飼料用の水源がなければならない。市の土地は市民のみの使用に限り、市民は遠隔地に住んだり、土地を売買したり抵当に取ったりしてはならない。もし住民が自分の土地を放棄した場合は、市の所有に戻り、市は他の開墾者に与えることが出来る。市の経営や小教区司祭の出費を支えるために、納税人口は、最低500人必要である³¹。」

市中心部の公共施設の建造、土地の確保、市区内での住宅地・農地計画が大きな三ヶ条である。補足として、街路の配置・各戸間の距離・火災防止のため各戸間の植樹などについても記述がある³²。特に町の中心部の計画についてはインディアス法と同じである。つまり、フィリピンでも、中南米と同様のスペイン植民都市計画が押し進められていたと考えられる。

マニラの石造建造物は、スペインやメキシコの建築をモデルとしていた。教会建築に限らずフィリピンにおける建築計画は、イエズス会・フランシスコ会・アウグスティノ会などのスペイン人宣教師たちが指導にあたった³³。アウグスティノ会のスペイン本部は修道士達に、宣教前の心がまえ・現地語の習得・協力体制などに加え、建築計画について以下のように記している。

「町の構成：より効率的な社会発展のために、住民は可能な限り従来の点在した村々から町に集住させられるべきである。新しい町の建設にあたっては、交通の便のよい川辺か海辺を選択すべきである。既存の開墾された土地と淡水魚池に隣接し、集落が既に形成されているところも良い。宣教師の恒久的な住居：1572年のアウグスティノ会令により、宣教の拠点となる恒久的な司祭館を構えることが奨励

される。これにより司祭のいる中心町カベセラと、カベセラの周辺村ヴィシタを行政地区の単位として定める。教育指導：宣教以外の一般教育も修道会活動の一部であり、修道院や司祭館は学校を併設し、町の社会・文化的事業の中心となる³⁴。」

教会や司祭館など宗教施設のあるブラサ周辺は、地域社会の中心的役割を担う空間であった。宣教の為に「恒久的建造物を」という項目は、従来の木造高床式の建造物ではなく石造の教会や修道院の建設を意味していた。

3-2 ヴィガンの都市空間構成

ヴィガンは現在、イロコス・スール州の州都である。ヴィガン市の全面積は2,740ヘクタールで、そのうち60.7%が農地である(図2)。市全体は39のバランガイ行政区に分かれており、そのうち、市街地バランガイ poblacion barangay 数は9、農村バランガイ rural barangay 数は30である³⁵。

図2 ヴィガンの行政単位：I～IXはポブラシオン(市中心部)のバランガイ番号を示す。

現在のヴィガン市の中心部を図3に示す。北をゴヴァンテス Govantes 川、東をメスティソ Mestizo 川³⁶によって区切られている。当初、南東部に港と要塞が設けられその後、北側に中心部が移動したと考えられている。北側中央に、サルセド広場 Plaza Salcedo があり、その東に聖パウロ大聖堂、西に州庁舎、北に司祭館と修道院、南に市役所などが配されている。大聖堂の南にはブルゴス広場 Plaza Burgos がある。近接して二つのブラサをもつスペイン植民都市は珍しい。この二つの広場から、東西・南北にグリッド状に街路が走るが、入手した測量図によると街区規模、街路幅員にはばらつきがある。軸も南北軸から時計回りにおよそ14.6～16.5度の偏角を持つ。

フィリピン国立公文書館の記録には、1870年のヴィガン中心部について「大聖堂の西には行政庁 Casa Real とサルセドの像、北には司祭館を含む修道院 Convento と墓地、南には神学校 Seminario がある。修道院の西には小さな家、神学校の西には財政庁 Hacienda Publica、警備士 Carabineros の宿舎、市役所 Ayuntamiento Municipal があった」と記されている³⁷。この記録から、中南米にも見られるスペイン植民都市の特徴であるブラサ・コンプレックスの形態を保っていたことがわかる。

現在、ヴィガンは「本物のフィリピン・スペイン的な公共建造物と都市計画の貴重な一例である」³⁸とされている。ユネスコの世界遺産に登録された後、ヴィガン市は国内・国外観光客向けのパンフレットに「国内で唯一保全されているスペイン植民時代の街であり、180以上の歴史的住居と建造物が残っている」とアピールしている³⁹。

図3 ヴィガン中心部の街路と街区割り

図4 街路幅員測定地点

伝統的なバハイ・ナ・バトは、街の東側に位置し、スペイン植民地時代の中国系メスティソの居住区内であるクリソログ Crisologo 通り沿いに多く残されている。この通りは近年、石畳敷きが再現され、観光写真やフィリピン歴史映画のロケ地となっている。

4. 街路体系と街区構成

街区体系と街区構成について、街路幅員、街区規模、街区の敷地区分（宅地割り）を中心に考察したい。

上述のようにヴィガンには近接して二つの広場がある。広場は都市計画の起点になったと考えられるが、二つの広場とも現況では正確な矩形をしてはいない。大聖堂の入口が面するプラサ・サルセドは、南・西の街路を含めず、東西が148m(南)～154m(北)、南北が64m(東)～72m(西)である。大聖堂の南のプラサ・ブルゴスは、東西南北の街路を含めて、東西が87m(北)～120m(南)、南北が87m(東)～95m(西)である。インディアス法は、プラサの縦横の比を2:3が理想であるとする。また規模は、300ピエ pie⁴⁰×200ピエ(約83.6m×55.7m)以上、最大でも800ピエ×300ピエ(約222.9m×83.6m)以下で、理想を600ピエ×400ピエ(167.2m×111.4m)としている。規模はともかく、プロポーシオンについては二つの広場とも理想に則っているわけではない。

4-1 街路幅員

交差点を主に、183ヶ所の街路幅員を測定した(測定箇所一図4)。その結果を表1にまとめる。街路は現在、車道と歩道からなっており、敷地境界は必ずしも明確ではない。

ここでは建物と建物の間(内法)を街路幅員とし、両側歩道部分を含めた幅を測定した。表1から分かるように、同じ通りでも街路幅員は場所によってばらつきがある。当初は一定の街路幅員で計画されていたとしても、歴史的に変化してきたことが推測される。東の南北街路キリノ Quirino 通りは緩やかにカーブしている。平均街路幅員は8.82mであるが、6.80mから10.60mの巾がある。また、歴史

的街区の中心街路として石畳の街路整備が行われた馬車道クリソログ通りは、平均8.70mであるが、7.12mから11.51mまでの巾がある。

比較的グリッドが維持されているように見える三つの南北街路 V.ロスレジェス V.de Los Reyes 通り(平均8.46m, 最小6.30m, 最大11.04m, 以下同様)、プラリデル Plaridel 通り(6.97m, 6.30m, 7.51m)、A.レジェス Gov.A.Reyes 通り(9.13m, 6.80m, 12.43m)と五つの東西街路ボンファシオ Bonifacio 通り(10.32m, 8.00m, 14.49m)、ルナ Gen.Luna 通り(8.80m, 5.93m, 12.09m)、サルセド Salcedo 通り(8.56m, 6.31m, 13.84m)、マビニ Mabini 通り(8.99m, 6.58m, 11.92m)、リベラシオン Liberacion 通り(11.30m, 7.00m, 16.49m)を見ても、ばらつきは大きい。

ただ、現在の目抜き通りであるリサル通り、ケソン Quezon 通り、またリベラシオン通りなどが車の交通のために拡幅されていることを考慮し、比較的グリッドが維持されているように見える旧市街のみに着目して平均値を見ると、興味深い数値が得られる。キリノ通りからリサル通りまでの9本の南北街路の平均は9.33m、ハシント Jacinto 通り以西を除く5本の平均は8.43mである。また、ブルゴス Burgos 通りか

表1 街路幅員測定値(183地点)

南北道路名	測定地点数	平均 [m]	最大 [m]	最小 [m]
Quirino	11	8.82	10.6	6.80
V.de los Reyes	12	8.46	11.04	6.30
Crisologo	10	8.78	11.51	7.12
Plaridel	13	6.97	7.51	6.30
Gov.A.Reyes	12	9.13	12.43	6.80
Jacinto	4	9.38	10.35	8.45
Quezon	13	13.08	17.00	8.75
Del Pilar	10	9.76	12.32	6.72
Rizal	7	10.23	11.40	8.60
東西道路名				
Burgos	3	18.26	31.30	9.04
Florentino	12	8.57	10.20	6.40
Bonifacio	19	10.23	14.49	8.00
Gen. Luna	19	8.80	12.09	5.93
Salcedo	14	8.56	13.84	6.31
Mabini	7	8.99	11.92	6.58
Liberacion	8	11.30	16.49	7.00
Abaya	9	8.25	13.00	6.13

らアバジャAbaya 通りまでの8本の平均は10.38m, 広場北のブルゴス通りとリベラシオン通り以南を除く5本の平均は, 9.05mである。

この街路幅員のスケールをめぐっては以下の街区規模のスケールと共に考察したい。

図5 街区規模

4-2 街区規模

測量図(1/3000)をもとに, 街区規模(街区を挟む街路の心々距離)について計測した結果を示すと, 図5のようになる。ばらつきはあるものの, ある程度一定の街区規模を確認できる。まず, 目につくのは南北街路キリノ通り, V.ロスレジェス通り, 東西街路ボンファシオ通り, ルナ通りに囲われた一街区である(図5A)。83m, 83m, 83m, 85m(北, 南, 東, 西: 以下同様の表示)のほぼ正方形をしている。また, ルナ通り, サルセド通りで囲まれたその南の街区も83m, 83m, 88m, 80mのほぼ正方形である。すなわち, 南北街路キリノ通りとV.ロスレジェス通りの心々距離はほぼ一定である。ボンファシオ通りからリベラシオン通りまで北から83m, 83m, 83m, 83m, 83m, 79m, 78m, 79m, 79m, 80mで平均は81mである。また, ボンファシオ通りとルナ通りの心々距離の平均およびルナ通りとサルセド通りの心々距離の平均は, キリノ通りからA.レジェス通りまでの間で, それぞれ86.8m, 77.4mである。

興味深いことに, クリソログ通りを考慮せず, V.ロスレジェス通りとプラリデル通りの間の心々距離を見るとボンファシオ通りから南にリベラシオン通りまで, 81m, 83m, 84m, 82m, 82m, 84m, 84m, 84m, 84m, 85mである。

以上の概観を念頭にスペイン植民地で用いられた単位を検討すると, 以下のような推論が可能となる。スペイン植民地関連の文献で頻繁に用いられるのはレグア legua である。トルデシリャス条約(1494)のポルトガルとスペインの分割線は, ヴェルデ岬諸島から370レグア西と決められた。また, 中南米では100レグア毎, 150レグア毎の要塞, 町の建設が薦められている。秀吉の時代に日本に来た宣教師の記録でもレグアが用いられている。しかし, レグアは長距離の単位(約5.5km)⁴¹で, 身近なスケールについてはピエカヴァラ vara が用いられる。ピエは上で既に触れたが「足」を意味し, ほぼフット(フィート)と同じである。ヴァラは「木組, 足場」に由来

し, 「細長い棒」を意味するが, 3ピエの長さをいう。他にパルマ palma(「手のひら」), ブラサ braza という単位が用いられるが, 1ヴァラは4パルマ, 2ヴァラが1ブラサである。具体的には1ピエ=0.2786m, 1ヴァラ=0.8359mとされている⁴²。フィリピンの建造物計画において, これらスペイン人の用いた単位の中では, 主にヴァラが使用されていたと言われている。

先に注目した正方形の区画は, ほぼ100ヴァラ四方である。また, 街路幅員はほぼ10ヴァラ程度となる。基本的に100ヴァラ四方を街区の単位とし, 街路幅員10ヴァラを基本として計画がなされたのではないかというのが本稿で提出する仮説である。

4-3 街区の敷地区分

各街区がどのように宅地に区分されていたかは明らかでないが, 現況から検討してみたい。各街区の縦横が何分割されているか, すなわち通りに面した土地が何戸の宅地に分割されているかを, 約100ヴァラの幅を持つボンファシオ通りルナ通り間, ルナ通りサルセド通り間, キリノ通りV.ロスレジェス通り間, V.ロスレジェス通りプラリデル通り間, プラリデル通りA.レジェス通り間について, 南北ボンファシオ通りリベラシオン通り間, 東西キリノ通りA.レジェス通り間の街区について見ると表2のようになる。

表2 街区の縦横の分割数

分割数	無	2	3	4	5
Bonifacio 通り Gen.Luna 通り間		1	1	3	1
Gen.Luna 通り Salcedo 通り間	1	2	2		1
Quirino 通り V.de Los Reyes 通り間		1	8	1	
V.de Los Reyes 通り Plaridel 通り間		1	8	1	
Plaridel 通り Gov.A.Reyes 通り間		3	4	2	
計	1	8	23	7	2

上記のように, 三分割の例が極めて多いことが分かる。可能性として, 街区を3×3の9分割する理念があったのではないかと考えられる⁴³。すなわち, 100ヴァラから街路幅員の計10ヴァラを引いた90ヴァラを三分割した30ヴァラ×30ヴァラの宅地に分割する計画理念である。

以上の推測, 仮説に対して, 興味深い中南米の事例がある。図6は, 1781年に描かれたボリビアの都市ラ・パス La Paz である。

ラ・パスはヴィガンに先立つ1546年に建設されている。プラサ・マヨールが中央に位置しているのは異なるが, 二辺に川が接しているのはヴィガンに似ている。ラ・パスの街区は一辺約84mであり, これは100ヴァラの近似値である。スペイン植民都市の街区規模は100ヴァラであったという一例となる。

図6を見るとプラサ・マヨールの下(北東)の街区が3×3の9分割である。しかし, 他の分割パターンは様々である。整然とした区割りとしては, もう一街区9分割の街区があり, 他に4×4の16分割がある程度である。また, この絵が描かれた時点で建設時点から200年以上経っており, もともと30ヴァラ×30ヴァラが単位であったかどうかは不明である。

絵からは4×4の16の分割パターンもあったとも考えられる。ひとつの根拠は面積の単位である。スペイン植民地において面積の単位として用いられたのはロアン loan(=279m²)である。これは丁度

図6 1781年のラ・パス (Kagan, Richard L. 2000)

20ヴァラ×20ヴァラの面積である。即ち、もう一つの可能性として、10ヴァラ(街路幅員)+20ヴァラ×4+10ヴァラ(街路幅員)=100ヴァラという分割が考えられる。一街区は16ロアン(1600m²)の面積を持つことになる。ただ、この場合、街区中央部へのアクセスの問題があるから、中南米の都市図に多く見られるように、街区をまず十字形に分割する(2×2=4分割 40ヴァラ×40ヴァラ=4ロアン)パターンであったと考えた方がいいだろう。

中心部(東西ボニファシオ通りからシラン D. Silang 通り、南北キリノ通りから A. レジェス通り)の敷地について、全宅地の規模を測量図から計測すると平均643.9312m²となる。ロアン単位の分布を見ると、図7のようになる。2ロアン前後のものが最も多いことが注目される。また、4ロアン単位の分割も見られる。

測量図からは心々間を100ヴァラとして設定した可能性が高い。ナイン・スクエア(9)分割を第1の仮説としたい。

5. まとめ

ヴィガンの街区体系・街区構成に関する以上の考察をまとめると以下のようになる。

- ① ヴィガンの建設が開始された1572-74年は、フェリペII世のインディアス法の出された1573年と同時期である。このインディアス法は16世紀初頭からの植民統治経験の集大成である。従って、フィリピンに1573年の法が即座に伝わらなかったとしても、スペイン植民都市の構成原理が何らかの形で用いられた可能性は高い。
- ② ヴィガンの場合、プラサを近接して二つ持っており、中南米で一般的な中央にプラサ・マヨールを持つ都市とは異なる。しかし、インディアス法も港湾都市の場合は港に接して広場を設けるとし

図7 中心部の宅地規模(単位:ロアン)

図8 街区割りの概念図

ており、広場の規模やプロポーションも逸脱しているわけではない。

- ③ 現状の街路幅員、街区規模のばらつきは大きい、旧市街の街区規模が80m~85mの正方形をしていることが注目される。スペイン植民都市で用いられた単位ヴァラを元にとすると、街区は心々で100ヴァラ四方、街路幅員は10ヴァラとしていたと考えられる。
- ④ 各街区がどのように宅地分割されていたかについて、現況の宅地割りをもとに考察すると街区の各辺は3分割される例が多く3×3のナイン・スクエアの分割が基本であったことが考えられる。寸法体系としても、100ヴァラから街路幅員の計10ヴァラを引いた90ヴァラを三分割した30ヴァラ×30ヴァラの宅地に分割する計画理念は考えやすい。
- ⑤ しかし、中南米の植民都市の場合、2×2の4分割が基本となっており、40ヴァラ×40ヴァラもしくは20ヴァラ×20ヴァラ(1ロアン)が単位となった可能性もある。

以上の考察結果は、住居類型との関係において検討する必要がある。バハイ・ナ・バトの類型と街区構成の関係については別稿としたい。

註

- 1 植民都市空間の系譜・変容・転成・保全に関する研究は「支配←被支配」<ヨーロッパ文明←土着文化>の二つを拮抗基軸とする都市の文化変容の研究である。また実践的には、植民地期に形成された都市核の再開発が都市計画上の課題になり、植民都市遺産を否定するの、継承するのかが大きなテーマとなりつつある。この研究は、文部省科学研究費助成研究「植民都市空間の系譜・変容・転成・保全に関する研究」(研究代表者布野修司、1999-2001年度)の一環である。
- 2 マニラに建設されたスペイン人街。1645年には5m厚の石造防御壁で囲まれていた。
- 3 Leyes de Indias: インディアスと総称されたスペイン領アメリカの植民地律法の総体を指し、法源はカスティーリャ法と本国から発せられた植民地のための諸立法から成る。植民地の経営には、既存の制度や法のみでは不十分であり、新たな制度や機関が導入され、多くの法令が本国から発せられた。1573年のフェリペII世によるインディアス法はこれらのうちのひとつである。17世紀中ごろには既に40万件を超えており、1680年にこれらを編纂したカルロスII世による「インディアス法集成」が公布された。新大陸の富の開発とカトリックの布教という2大方針に集約されるが、多くの不備や欠陥があり、論理的な体系を欠いていた。佐藤明夫「インディアス法」『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社、pp.50~51、1999
- 4 タガログ語で「石の家」を意味し、スペイン植民期フィリピンの低地キリスト教地域に流布した、一階石造・二階木造の都市住宅。現地住民・メキシコ経由のスペイン人・中国人の技術が混合した様式で、現在は「フィリピン的な歴史住宅様式」とされている。
- 5 1505?-72スペインのバスコ地方出身。メキシコで植民地行政についた後、フィリピン諸島初代総督で先遣都督 adelantado の称号を有した。

- 6 Antonio de Morga (1966)
- 7 plaza: スペイン語で「広場」の意味。ギリシャ語 platea 「広い通り」, ラテン語 platea 「通り」より派生。
- 8 cabecera/poblacion: スペイン語で「首部・首都」の意味。地域行政の中心となるスペイン植民都市で、市場・教会・市役所をもつ。
visita: スペイン語で「訪問・巡察」の意味。フィリピンでは司祭の在住しない周辺村の意味で、cabeceraの教会の常任司祭が定期的に訪れた。visitaよりも更に小規模の集落は sitio と呼ばれた。
- 9 ヴィガンの名は、この地方の川辺に植生する葉の広い植物ビガン bigan (*alocasia indica*) に由来する。Foronda, A. Juan: The Establishment of the First Missionary Centers in Ilocos 1572-1612, *Ilocos Review* Vol. III, No. 1 & 2, pp.1-75, 1971.1-12
- 10 Aluit, Alfonso J.: By Sward and Fire—the Destruction of Manila in World War II, 3 February—3 March 1945, Bookmark, 1995
- 11 エンコミエンダを得た征服者。エンコミエンダとはスペイン語で「委託」を意味する。一定地域に住む先住民の労働力を使用する権利と、彼らを保護しキリスト教に改宗させる義務を、スペイン王権が私人に寄託した制度である。Justicia Mayor はスペイン語で「司法権の長」の意味。
- 12 サルセドが一度ヴィガンを離れたために、ヴィガンの設立は1572年と74年の2説がある。
- 13 Baraganza (1971)。現在ヴィガンの「要塞・砦」の痕跡は見られない。
- 14 1494年のトルデシヤス条約によってスペインとポルトガルは新世界を分割し、その領有権を獲得したが、同時にそこに住む現地住民をキリスト教徒に改宗する義務をローマ教皇に負うことになった。Foronda (1971)
- 15 マニラ以外の地域ではスペイン人官吏の絶対数が少なく、カトリック宣教師が村や町の唯一のスペイン人であることが多かった。小教区教会の司祭が、同時にその教区範囲の公務執行を行い、洗礼・堅信・結婚・死亡など、教会の秘蹟記録がそのまま人口記録や歴史資料となっている。Cullinane, Michael: Accounting for Souls: Ecclesiastical Sources for the Study of Philippine Demographic History, Population and History, Ateneo de Manila University Press, pp.281-346, 1998。本稿ではアウグスティノ修道会の保管する資料を含めた、現代のイロコス地方アウグスティノ修道会士達による歴史資料 *Ilocos Review* Vol. III, No. 1&2, 1971.1-12 を参考にした。
- 16 スペイン語で「削減・制定」を意味する。南米のスペイン人入植地で先だっで行われたレドゥクシオン(集落の数を減らし大きな街に集住させる計画)が、のちにフィリピンにも持ち込まれた。焼畑農業を主としていたフィリピンでは、思うように実現しなかった場合が多い。メキシコでのブルゴス法(1512年)ではレドゥクシオン後インディオが再び離散するのを防ぐために、古い村 pueblo を差配することも定められていた。税・労働力の搾取とカトリック宣教のしやすさから、レドゥクシオンは押し進められた。
Cortes (1990): Semo, Enrique, 原田金一郎訳 *Historia del Capitalismo en Mexico, Los Origenes 1521-1763*。『メキシコ資本主義史 その起源』大村書店, 1994; 山本徹「Reduccion」『ラテンアメリカを知る事典』平凡社, p463, 1999
- 17 タガログ語で「集落・街区」の意味。ムスリムやスペイン人到来以前から存在したフィリピンの村落共同体の呼び名に由来し、元々は首長 datu と 30-100家族からなる。スペイン人は barrio バリオと呼び名を変えたが、1972年マルコス大統領戒厳令体制下に再びバランガイと名づけられた。
- 18 菅谷成子「スペイン植民都市マニラの形成と発展」『アジアの大都市 [4] マニラ』日本評論社, pp21-47, 2001
- 19 Antonio de Morga (1966)
- 20 Parian はメキシコ系スペイン語の市・市場。中国人が商業に携わっていたことからか、-cillo はスペイン語の縮小辞。
- 21 Sangleys はフィリピン在住スペイン人による中国人の呼び名。
- 22 King, Damaso Q. (1990)
- 23 King, Damaso Q.氏2000年8月31日インタビュー。ナトゥラレスであっても富裕層ならメスティソ地区に住むこともあった。メスティソ川より東の市街にも中・下層メスティソが住んでいたと言われている。
- 24 Foronda (1971)
- 25 スペイン語で「区・地区」の意味。アラビア語の barri 「郊外の」より派生。
- 26 Brangaza (1971)
- 27 King (1990)
- 28 Mojares, Resil B: Casa Gorordo in Cebu-Urban Residence in a Philippine Province, Cebu Ramon Aboitiz Foundation, 1983; Zaragoza, Ramon Ma: Images of Asia-Old Manila, Oxford University Press, 1990
- 29 16世紀末にメキシコ経由でフィリピンにきたアウグスティノ修道会士たちの出生地はスペイン本国であった。
Nieto, Marcelino: The Work of the Augustinians in Ilocos, *Ilocos Review* Vol. III, No. 1&2, pp.166-226, 1971.1-12
- 30 Cortes (1990)
- 31 Ibid.
- 32 Ibid.
- 33 例えば代表的なサン・アグスティン教会 San Agustin (1607) などは、16世紀メキシコの教会・修道院建築の「正確な復元」を試みたものとされている。Foronda (1986)
- 34 Nieto (1971)
- 35 Vigan Tourism Council, Vigan—A Unesco World Heritage Site, 2000
- 36 メスティソ川の名は、中国系メスティソが多かったことに由来して、スペイン植民時代に付けられた。また、ゴヴァンテス川とメスティソ川はアブラ Abra 河の分流であり、河口付近につくられた街である。King (1991)
- 37 King (1990)
- 38 Baraganza (1971)
- 39 Vigan Tourism Council (2000)
- 40 1 pie は約 1 フィート = 0.278635m (12プルガダ pulgada (インチ))。pie は「足」、pulgata は「親指の大きさ」を意味する。
- 41 1 legua = 33331/3braza = 5572.705m
- 42 石井米雄監修『フィリピンの事典』同朋舎, 1992。ピエは尺、ブラザが尋と考えていい。
- 43 現在2分割、4分割であっても、地図を見ると「元々3分割であった宅地の一つをさらに2で割ったために、現在4分割であるもの」や「元々3分割であった宅地2つを、現在1つに併合しているために2分割であるもの」が見受けられる。

主要参考文献

- [1] Antonio de Morga, 神吉敬三訳 *Sucesos de las Islas Filipinas*。『フィリピン諸島史』岩波書店, 1966(1609)
- [2] Baraganza, Jose Vicente: To the End of the World, *Ilocos Review* Vol. III, No. 1&2, pp.135-165, 1971.1-12
- [3] CEDEX: La Ciudad Iberoamericana, Biblioteca CEHOPU Madrid, 1987
- [4] CEDEX: La Ciudad Hispanoamericana El Sueno de un Orden, CEHOPU Madrid, 1997
- [5] Cortes, Rozarion Mendoza: Pangasinan 1801-1900—The Beginning of Modernization, New Day Publishers, 1990
- [6] Foronda Jr., Marcelino A.: Insigne Y Siempe—Essays on Spanish Manila, De La Salle University, 1986
- [7] Javallana, R, Reyes, E.V. and Zalcita F.N. *Filipino Style*, Edition Didier Millet, 1997
- [8] Kagan, Richard L.: Urban Images of the Hispanic World 1493-1793., Yale University Press, 2000
- [9] King, Damaso Q.: Ciudad Fernandina O Vigan, Vigan Convent Archives, 1990
- [10] King, Damaso Q.: Parish Church and Cathedral of St. Paul, Vigan, The Ilocos Review, Vol. 23, pp.2-32, 1991
- [11] McCoy, A.W. and de Jesus E.C.: Philippine Social History—Global Trade and Local Transformation, Ateneo de Manila University Press, 1982
- [12] Rabang-Alonzo, Fatima Nicetas: An Inventory of 120 Ancestral Houses in Vigan, Ilocos Sur, Philippines, Save Vigan Ancestral Homes Association INC, 1996
- [13] Rabang-Alonzo, Fatima Nicetas: Conservation of the Historic Core of Vigan, Master of Architecture Thesis, University of the Philippines Diliman, 1990.3
- [14] Reed, Robert R.: Colonial Manila—The Context of Hispania Urbanism and Process of Morphogenesis, University of California Press, 1978
- [15] 鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』中央公論社, 1997
- [16] Zalcita, Fernandez N. and Tinio Jr., Martin I.: Philippine Ancestral Houses

(2001年7月10日原稿受理, 2001年11月27日採用決定)